講演

日本醫學史上より觀たる流行病

富士川游

先日、加藤博士から何か話すやうにと云ふ御命令でありまして、今夕罷出た次第であります、それで平生研究致して居る範圍の内で、通俗な事項を擇びまして、流行病を歴史の上から見た所、即ち文化史の方面から見たる流行病のことをお話いたす積りで、斯くの如き題を掲げた譯であります。平生御聽きになる問題とは方面の違つたことで、御興味の尠ない事と考へますけれども暫く御清聽を煩はします。

普通、流行病と申して居りまするものは、我邦では古い頃から疫病と云ふ名前で知られて居るのでありますけれども、其中には或地方に限つて行はれる病氣、たとへば日本、臺灣或は支那と云ふ風に、ある地方を限つて行はれるものがある、これを醫學の方で、風土病或は地方病と稱して居るのであります。又流行病と名づけて、或時を限つて多少廣い範圍に行はれる病氣もあります、又一時に烈しく所謂大流行を致す所の病氣もあります、即ち「エンデミー」と、「エピデミー」と、「パンデミー」と云ふ三つの種類

に別たれるのでありますが、此三つを一緒にして、我邦では、昔から疫病と云つて居つたのであります。

古事記、崇神天皇五年の條に『此天皇之御世、役病多起、人民死爲盡』とありて、初めて役病と云ふ文字が出て居ります。この役病の文字はこれを「エヤミ」と讀むのでありますが、「エ」と云ふのは申す迄もなく役（人夫）です。丁度人毎に病むことが、役に差されて立つやうなので、これをエミヤとしたので、日本書紀には疾疫、疫疾、疫氣、疫病と、種種の文字を用ひ、これに「エノヤマヒ」若くは「エヤミ」の訓が附けてあります。支那でも、釋名に疫役也、言有鬼行疫也とありまして、その義は同じである、又說文に「民皆病也」と註がある。その『民皆病也』と云ふはラテン語の「エピデミー」と同じ意味であります。獨逸でも「フォルクスクランクハイテン」（國民の病）と名づけて居ります。各國共に語源を調べると同じ樣な意味からして疫病と云ふ名前が起つて居ります。それから疫病のことをヤクビョウと云ひましたのは恐らくは鎌倉時代の末であらうかと思ひます。明かな證據がありませぬすから判然とは分まりせぬけれども、恐らくは鎌倉時代の末でありませう。此時代の末に、梶原性全が著はした「萬安方」の內に疫病にヤクビョウの假名がつけてあり、又同人の著書「頓醫鈔」の內にも疫病にヤクビョウの訓がつけてあります。それから、流行病ばかりでなく、「玉莖疫病」「玉門疫病」といふ名稱も見えて居りまして、其疫病は甲より乙に傳染をする病と云ふやうな意味を含ますまでに進むで居ります。西洋でも初は單に流行すると云ふだけであつたのが、後の代になつてからそれに傳染するといふ意味が加は

つて來たのであります。故に、疫病と云へば廣いものでありまして、流行性に、又は傳染性に一時に現はるるもの、若くは長く續けて現はれるものも皆この内に含んで居る。隨分多い譯でありますが今夕は其二三につきてお話致します。殊に醫學に關係のない御方にも多少の興味があらうと自分で考へますることを拔てお話致さうと思ひます。

歷史の上で御承知でありませうが、欽明天皇十三年（西曆紀元五五二年）に疫病が大變流行した。此時には例の佛像が始めて日本に渡つて來た、日本には元來日本の神樣があるに拘らず外國の佛を祭つた罰に因つて疫病が起きたといふ說が行はれた。併し此時の病氣に就いては何とも書いてない。たゞ疫病が流行したとのみ書いてある。非常に多く人が死んだのだけれども、何う云ふ病氣であつたか分らぬ。それから三十年程經つて敏達天皇十四年に流行病が行はれた。それで此の如く疫病の流行するのは蘇我氏が佛法を興行するためだといふので、守屋大連自から寺に詣りて佛像を燒き棄てた、その時、守屋大連と天子樣が疫病に罹られた。その流行病は皮膚に瘡を發して、熱の高い、丁度燒かれる樣な苦しみのあるものであつた。それで俗間では全く佛像を燒いた罰だといつたそうであります。これは恐らくは疱瘡でありませう。

疱瘡と云ふ病氣はどの位古昔の時代から有つたか殆ど分らない病氣であります。印度では經文の中に已に疱瘡の事が書いてあるから餘程古いものであります、西洋では亞刺比亞の象戰爭の時——丁度モハ

メッドの生れた年、即ち五百七十二年の頃か、或はもう少し前五百五十八年頃か、或は五百八十年頃か、凡そ此三つの頃に、疱瘡が流行したことがあつて、これが疱瘡に就て、初めての記錄があります。是れは恐らく印度から傳はつたものでありませう。支那では今申した亞剌比亞よりもズッと古い。それも支那の記錄には至つて曖昧な處がある。建武年間に始めて疱瘡が南陽の捕虜から傳はつたと言はれて居る、しかし建武の年號は、二つあつて、後漢の光武帝の時と、東晉の元帝の時とであります、多分、東晉の建武でありませう。又或說には建武でなく建元だと云ふ。建元と云ふ年號は前漢であつて、此時張騫といふものが西域月支國(今の波斯あたり)に使した時から傳はつたと云はれて居る。大分年代が違ひますけれども、角に角西北の方の外國と戰爭のときに傳はつた。或はそれより後に月氏國(今の波斯あたり)に人が行つてそれから傳はつたと云ふので、孰れにしても外國から傳はつたといふことは確かであります。即ち疱瘡の本家本元は印度でそれから、西と東に分かれて、西の方に參つたのが象戰爭の時代、東の方に參つたのが建武の遠征の時である。それで、支那では疱瘡の古名を虜瘡と名づけられてある。多數の傳染病又は流行病の中には戰役と關係あるものが澤山ありますけれども、最も古くからその關係の認められたのは疱瘡であります。後に天然痘を豫防する一種の方法(種痘)が發見された爲に其害は漸々少くはなりましたけれども、何れの戰爭にも疱瘡の流行は附いて居る。近時歐洲の戰爭に於ても既に餘程各地に行はれて居るやうで、墺太利にも、露西亞にも、或は獨逸の南の方にも行はれて居るといふこ

とであります、追々我邦にも傳はるかも知れませぬ。

次はハシカ(麻疹)と申す病氣のことでありますが、ハシカは其形が初の間は疱瘡に似て居つた――初と申すのは、此病氣の新たに起りました時を謂ふのでありますが、疱瘡によく似て居つたために、ハシカを疱瘡と區別することは困難でありました。今日では餘程の稀有の場合を除くの外は、素人でも分かる位に疱瘡とハシカとは其形が違つて居りますけれども、麻疹の起りたては兩者が殆ど違はなかつたやうであります。其爲に我邦では、前にも有つたのでありませうけれどもこれを認むることが出來なかつた。支那では、ハシカは宋の終の頃になつて始めて起つた樣でありますが、我邦では平安朝時代(長德四年頃)に、既に此病氣があつたので、源氏物語の中には赤疱瘡と書いてあつて、それを「アカモガサ」と訓ましてある。アカモガサとは赤い疱瘡といふ義であります(モカサは疱瘡のことである)今日醫學の方ではハシカを麻疹と云つて居りますけれども、麻疹と云ふ名はズッと後に出來たので、其以前は赤斑瘡の稱呼を用ひて居りました。麻疹は、宋の頃(鎌倉時代の中頃)に支那で始めて用ひられた病名でありますけれども、我邦でハシカを麻疹と呼んだのはズッと後の事であります。アカモガサに次でハシカと云ふ名前が出來ましたが、この名前が出來たのも、やはり鎌倉時代の末でありました。この病氣に罹ると咽喉に何か芒刺がたつて居ると云ふやうな感じがする所から名が付いてハシカと云はれたのであります。それで別にイナスリの名もあります。今日でも俗間では主にハシカと云ひ、醫者の方では麻疹と云

つて居る。支那で麻疹と云ふ名を附けたのは疹の形が小さい麻粒のやうであるといふことに基づく、西洋の語でも矢張、ハシカのことに粟粒様疹の意味の名前が附けてあります、何れも疹の形からつけた稱呼であります。

前にも一寸、お話致したやうに、ハシカ(麻疹)は疱瘡と似て居りますけれども、その傳染の具合、蔓延の具合が餘程疱瘡とは違つたものでありまして、戰役と關係して起つたといふ著しい例は殆どありませぬ。固より多數人が集まつた場合に起るべき流行病とは考へられますけれども、何等か其處に一つの條件があるものと見えまして戰役などによりて大流行があつたといふ著しい例はありませぬ。

戰役に關係し、殊に人間の交通に先だつて病氣だけが先に來るといふ例に擧げてよろしいのは疱瘡も然うでありますが、最も著しいのは黴毒であります。黴毒も其初は一時に大流行をして多くの人がこれが爲に死んだ。是れは戰役と非常に關係の多い病氣であります。さうして各國の歷史を調べて見ると、そう古くない樣であります。ズッと昔から有つたやうに言ふ人が西洋にありますけれども、これは十分の論據が無いやうであります。我邦の記錄では、黴毒は室町時代の末に始めて現はれたのであります。京都に竹田月海と云ふ有名な大醫があつて、其人の隨筆の中に「永正九年人民多く瘡あり、浸淫瘡に似たり、稀に見る所なり、之を唐瘡、琉球瘡といふ」ことが書いてあります。永正九年は西曆千五百十二年に當ります。其翌年即ち永正十年の甲州の妙法寺の記錄を見ますと「此年、天下にタウモといふ大な

る瘡出て〻平愈すること良久し、其形譬へは癩人の如し、食者達者なる人の様に進む也」とあります、是れは素人の記錄でありますけれども、是れだけでも確に黴毒と云ふことは分ります。タウモといふのは唐瘡の事でありませう。そこで京都の竹田月海の記錄では永正九年、甲州の妙法寺の記錄では永正十年でありますが、其當時の交通の狀態から推して見ると、先づ一年位の間に京都から甲州まで黴毒が傳はつて來たとも見えます。

斯かる黴毒といふ病氣が何うして日本に起つたか、これは前に申した疱瘡と同じやうに、何うしても外國から來たものと思はなければならぬのでありますが、其徑路が文化史の上から考へて餘程面白いのであります。

西洋で此病氣が始めて多くの人の目に着きましたのはコロンブスが亞米利加を發見した時分の事であります。即ちコロンブスが亞米利加に着いてから、其遠征の兵隊が土人と交際して此病氣を持つて西班牙に歸つた。其れから蔓延したと云ふ說があります。是れは大分有力な人が唱へたために隨分行はれた說であります。所が、コロンブスの遠征より十年も前に以太利では既に此病氣があつたのでありますから、コロンブスの兵隊が始めて米國から持つて歸つたと云ふのは事實でありませぬ。其他亞弗利加から持つて來たとか、或は亞弗利加と亞米利加の間の島あたりから歐洲へ持つて來たと云ふ說もありますが、しかしながら、其頃以太利に此病氣のあつたと云ふことは確かであります。

黴毒が著しく蔓延したのは十五世紀の終(一四九五年)に、佛蘭西のカール第八世が各國から兵隊を募集して以太利を遠征した時であります。巴里を出で、マルセーユを通過して、以太利に行つてネヤペルに滯陣して居つた時に非常に此病氣が起つた。御承知の如くカール第八世が率ひた兵隊の內には、英吉利の者も居り、獨逸の者も居り、和蘭、西班牙等、各國の者が居つたのであります、殊に記錄に依りますと、多數の婦人がその內に居つたと云ふ。何の爲に居りましたか、婦人が軍隊の中に居つた。其爲に黴毒の蔓延が頗る激しかつたのであります。千四百九十五年の秋に伊太利から歸つて軍隊を解散した年に佛蘭西には此病が流行して、瑞西一帶、獨逸一帶、丁抹まで傳はつた。翌年海峽を渡つて英吉利に傳はり、それから和蘭に傳はつた。それから最も當時交通の不便であつた所の露西亞には、千四百九十九年、即ち三年程後れて傳はつた。所がこの病氣は何れの國でもまだ是れまで知らない病氣で名の附け樣がない、ために、各國で、各々この病の本元と認むる土地の名を冠し、以太利では之を佛蘭西病と云ひ、獨逸では佛蘭西病と云つた。佛蘭西ではネヤペル病又は伊太利病と云つた。西班牙では佛蘭西病と云つた。又西班牙病の名もあつた。さう云ふ風に、初は名の附け樣がないから、主として此病氣を持つて來たと假定するところの國の名或は街の名を以て名づけて、多數の名が出來た。黴毒は此の如く千四百九十五年に初めて歐羅巴に熾に行はれたのでありますが、其翌年即ち千四百九十六年に御承知の喜望峰の航路が初めて開けて葡萄牙人が東亞細亞に來るやうになつた。其時は丁度支那の弘治九年に當るのであ

ります、それて葡萄牙人が東洋に來ると間もなく此病氣が東洋に起つた。「弘治末年民間惡瘡を患ふ、廣東人より初まる。吳人は知らず、呼んて廣東瘡と云ふ、其形似たるを以て楊梅瘡と云ふ」と續醫說に記載してあります。即ち一千四百九十六年に葡萄牙人が來て間もなく此病氣を東洋に持つて來た。さうして名が分からないから廣東瘡と稱した。北の方の人は知らないで、南の方の廣東に來たと云ふ所から廣東瘡と云つたのであります、そこて廣東瘡と名づけられた黴毒が支那に來たのが弘治の末年とすれば、千四百九十六年から間もないことであります、而してそれが日本に來たのを永正年間とする。永正九年に初めて京都に來たとしても、其間は僅か十六年しか經つてゐないが、長崎に來たのはまだ此より前でありませう。當時の交通の狀態から云へばズン〳〵此病氣は東漸したのであります。西洋人が日本に來たのはそれから後でありますが、西洋人は來なくても、西洋人の拵へた病氣だけは人から人に傳はつて、前に我邦に來て居る。後に西洋人の來べき道を通つて來て居る。是れは文化史の上から云つて餘程面白く考へられる事であります。

唯、それぱかりではない。是れより餘程前に底野迦（テリヤーク）と云ふ藥が日本に來て居る。奈良朝時代に來て居る。希臘の名高い醫者の拵へたものていろ〳〵の毒を消す爲に大層はやつた藥ですが、日本と西洋との交通が歷史に書いてない奈良朝時代に其名も實物も來て居るやうてあります。是れは餘談でありますけれども、丁度其れと同く、歐洲の人の間に始めて現はれた病氣が、まだその人の來ない內に、後に其人の來

べき道を通つて傳はつて來ると云ふことは、文化の歷史の上に餘程面白いことであると思ひます。

已に前にも言つた通り、黴毒は其關係から見ると餘程面白い關係を有つて居るのであります。初めて流行した時には西洋では癩病と違はなかつた。癩病と黴毒とは區別が付かなかつた。我國でも「其形例へば癩人の如し」とあつて、やはり癩病と異ならない。餘程似た病氣であつた。であるから初は黴毒も流行病であつてバタ〳〵人が死んだ。さうして病氣の原因が分らなかつた。安土桃山時代の名高い大將で此黴毒に罹つた人もあります。しかるに、漸々人間から人間にうつり、同じ人種の人間の間を漸々潛つて來る內に漸々其病氣の形が變はつた。疫病と云ふものは、どの病氣も然うてありますが漸々同じ人種の人間を經て來る間に形が變はつて、後には殆ど初のものと違ふやうになつて來る。黴毒は殊にそれが著しい。初は癩病の樣で皮膚に不潔の瘡が出來たのであるが、流行の第二期と稱する時には大變違つて來て、今度は髮が拔ける樣になつた。骨が惡くなるのは其次のことで、それより前に髮が拔ける樣になつた。十六世紀頃の歐羅巴人の畫像を御覽になると、髮をズッと長くして居るけれども、鼻の下に髭のある人はない。所が千五百二十年頃に至りまして、髭の無いのは黴毒であるといふやうな嫌から、自分は黴毒でないと云ふ證據に鼻の下に髭を殘した。今日行はれて居る蓄髯の風は明にこの時の名殘であるといふことであります。兎に角髮が拔ける樣になつて、それから次に骨に這入る。それには病氣が人間の體を通る關係以外に、いろ〳〵藥を用ひて病氣の形を變へると云ふ關係もありませうが、漸々變は

つて來て居ります。

黴毒は今申した通り戰役に大變關係のある病氣て、始め戰役から起り、又戰役と云ふことは此病氣を傳へるに都合が好い。軍隊に於ける病氣として最も重大なものてありませう。花柳病と共に最も重大な意味を有つて居るもので、生物學的に黴毒及花柳病が性欲に關係した病氣てある爲に人種を惡くしたことは、ナポレオン戰爭の時にも著しい例があります。近頃參りまする獨逸の醫學の雜誌を見ると盛に其事を論じて軍人に於ける黴毒及花柳病の豫防治療等を講じて居る。是れは千八百七十年の普佛戰爭に懲りて居るからてありませう。

次は癩病てあります。癩病は非常に古い病氣て、我邦ても何時から始まつたか分からない位てあります。餘程前から有つた病氣てありませうが、その起原はよくわかりませぬ。印度にはカマラなんといふ語がある。それは癩病てありませう。レプラと云ふのは西洋の語てありますが、殆ど同じ意味の言葉てあります。我邦ては古い處て此病氣を何と云つて居つたか分りませぬが、癘と云ふ字の出て居るのは歴史の上ては大分古い所にあります。癩と云ふ字を書いたのは後のことて、元は癘と云ふ字を用ひたのてあります。カツタイ。カハラモノ。アナバタ。オトラシヤなどと云ふ名前もあります。オトラシヤと云ふのは「通らつしやい」「お通りなされ」と云ふ意味て、乞食などが物を貰つて歩くときに「通れ」と云ふ意味てありませう。カツタイは乞食てす。支那に害大疥と云ふ名があつて、それからカツタイといふ名が

出來たと云ふ人があるけれども、恐らくは然うでない。カハラモノと云ふのは京都で乞食が加茂川の河原に居つた處からであります。これは癩病人の生活の狀態から附けられた名前であります。

癩病と黴毒とは西洋でも我邦でも初は殆ど同じ樣であつて、さうして非常に穢いものであります、もと、癩病には皮膚の崩れるのと然うでないのと今は二通りあります。一方は麻痺癩で、即ち神經癩である。一方は結節癩であります。さうして初は黴毒の穢い瘡が出るのと全く同じであつたが、代々同じ人種を經て居る內に漸々其方が少くなつて、麻痺癩の方が多くなつた。今日でも新しい癩病が起れば何處でも結節癩と稱へて居る。例へば布哇に於ても、北亞米利加の西岸に於ても皆然うであります。さうして誰にでも傳染する。その傳染すると云ふことが能く分る。であるからして日本では大寶令の中に、癩病は妻を去る條件の一つになつて居る。妻を去る條件が七つあつて、其中の第一番目に癩病と書いてある。さうして大寶令の註釋即ち令義解には「此病有レ蟲、食二人五臟一、或眉睫墮落、或鼻柱崩壞、或語聲嘶變或支節解落也、又能注二染於傍人一、故不レ可二與レ人同一床也」とあります。一緒に寢てはいけないと云ふ理由で妻を離別することが出來ると云ふのです。であるから令義解の出來ました時には、素人が見ても癩病は傳染すると云ふことが明かになつて居つた。けれども足利時代の中程になりましては、癩病は佛說に謂ふ所の業の病である、前世の惡業に因つて起る病である、傳染する病とは認められぬやうになつた。其時から癩病は遺傳すると云ふことに見る所が變はつた。即ち癩病の家は系統を引くと云ふことになつ

た。今日でも癩病は家筋を引く、傳染する病ではないと思はれて居る。けれども、近頃では明に傳染する性質を有つて居ると云ふことが、學問上の研究によりて分つた。併し非常に緩漫に傳染するのであるから、傳染したと見られないのであります。癩病も黴毒と其形の具合が同じであつて、さうして人間の體を漸々經て行き、又其間に治療して行く——其外にも條件がありませうが、其等の條件が加はつて、初は皮膚に出て居つたものが漸々少なくなつて、神經の方になつた。マア追込んだのです。今日では癩病でも黴毒でも神經の方が多い。又神經に來るのが多いのであります。

それから流行性感冒と云ふ疫病がありますが、これは大流行性のものであります。大流行性と申すと、一時に非常に速く廣く蔓延するのです。一時に非常に速く蔓延するところの疫病は大變に人が騒ぐ。さうして驚いてこれに名を附ける。これは支那でも西洋でも然うでありますが、我邦でも流行病には餘程面白い名の附方があります。後一條天皇の長元二年に流行したのは福來病と云つた。これは頸部が腫れるので、ハサミバコ即ち流行性耳下腺炎であります。それから建久八年に流行したのは一心房病と云つた。どうも意味が分りませぬ。高倉天皇の承安元年にあつたのは羊病と云つた。仙洞御所に羊が三頭居つて、それは外國の羊であつた。其羊から出たと云ふ意味です。それから治承三年にあつたのが錢病。寛元二年にあつたのは内竹病と云ふ名を附けられた。これは三日ばしかと稱するものです。次に天福元年にあつたのは夷病と云つた、是れは外國から來たと云ふ意味です。それから寛文二年の疫病は鬱陀鬼

と名づけられた。此等は室町以前の疫病に附けられた名でありますが、近世てはインフルエンザ、即ち流行性感冒に種々の別名がつけられました。馬琴が書きましたものゝ中にも大分これを擧げてあります。明和六年にあつたのが稻葉風、安永五年にあつたのがお駒風。これはこの頃白木屋お駒と云ふ淨瑠璃が流行したからてある。天明四年のが谷風。これは御承知の谷風梶之助と云ふ力士が大變力自慢て自分は士俵の上て負けることはない、寢ることは病氣の時だけだと言つた、その谷風が流行性寒冒に侵されたからてある。安政七年に將軍家の猪狩があつて、猪狩風と名づけられた。享和二年がアンポン風、それから薩摩風、それからお七風。御承知の八百屋お七から附けられたものてある。文化五年がネン〳〵コロリやと云ふ俗謠がはやつたので、ネンネコ風、それから天保三年のが琉球風。これは琉球から使者が來て其際に病氣が附いて來たといふのである。安政三年のがアメリカ風。と云ふ風に、大流行をする病氣に色々妙な名がつけられるのてあります。

さうして此「パンデミー」即ち大流行病は非常に速い。コレラが速いと云ひますけれども、コレラの傳播は稍々緩漫なものてあります。たとへば安政五年のコレラは五月初旬長崎に傳はり山陽道を徑て、八月下旬に京師に行はれ、江戸には七月二十四五日の頃から行はれた。隨分長く掛かつた。流行性感冒は中々そんなことてなく、僅かの時日の內に廣く全世界までも廣がるといふ流行の仕方てあります。他の病氣て斯樣に速く一國に擴がるのはない。それて流行が非常に大きいから非常に驚いて騷ぐ譯てあらうと思

ひます。此處で少しく醫學の專門の方に這入りて考へて見まするとと、流行性感冒は他の傳染病若くは流行病と云ふものとは其原因が何等か違つてゐなければならぬ。即ち人から人に傳はると云ふやうな傳染の仕方では、一週間に全世界に蔓延すると云ふやうなことは一寸出來難いのであります。一寸常識で考へて見るといふと、何等か非常に輕いものであつて、さうして空氣中にあつて、其れが速く送り付けられるか、或は同時にても送られると云ふやうな働がなければならぬ病毒のやうに考へられるのであります。

甚だ要領を得ませぬ話で御退屈であつたらうと思ひます。要するに流行病と稱するものは、大流行病、流行病、地方病と此三つ引括めて申すのでありまして、其中には人間の集合する機會、殊に戰爭の如き一種身體の營養を害する狀態の加はつたと云ふ場合に起る病氣があります。殊に我邦に於ては元はなかつたペストが明治になつて初めて現れた。又明治の前に多少有つたやうに思はれるが殆ど分らなかつた發疹窒扶斯と云ふのが加はつて參りました。此兩つも戰爭と大關係があります。殊に發疹窒扶斯は殆ど戰役窒扶斯、飢餓窒扶斯と名づけられる位で、戰役と親密な關係を有つて居りますけれども、我邦の歷史では此ペストと發疹窒扶斯と云ふものは殆ど無かつた、明治になつてから他の病氣と區別されたので、今後は此病氣は必ず出來て歷史上の材料を作ることゝ考へますけれども、幸にして是れ迄の歷史には之に關する材料はないのであります。謹で御清聽を謝します（完）

責レ人者原(タヾセバ)ニ無過於有過之中一則情平。責レ己者

求ニ有過於無過之內一則德進(榮根譚)